

敦煌学の現状——中国敦煌学発展の近況——

段 文 傑

鄧 健 吾(訳)

敦煌学は現在、世界でも注目されている学問であり、その研究領域は大変広く、内容も豊富である。

敦煌学はこの世に生まれて、すでに八十年近くになる。人間の^{せいじ}齢八十は、すでに晩年に当たるが、敦煌学はさにあらず、いまだ成長期の若者であり、天真爛漫で、生氣あふれる学問である。

敦煌学には敦煌文書と敦煌石窟という二つの学問的ジャンルが含まれ、これは一組の双子であるとも言える。

敦煌文書は、今世紀初め、一九〇〇年に王道士が発見した蔵経洞出土の四、五万点に及ぶ古代文献であり、その

中には、歴史、政治、経済、軍事、宗教、民族、文学、芸術、言語、文字、科学技術、中西文化交流等、各方面の資料が含まれ、名実共に、中世紀における一つの偉大な図書館である。敦煌石窟は、わが国における最大の規模を有し、歴史が最も古く、内容も豊富であり、そしてまた、芸術的にも精緻な、世界に類例のない芸術の宝庫である。この石窟は、わが国封建時代の各階級、階層、民族の様々な社会生活を形象として反映し、同時に、人間の現実生活の苦難からの脱皮を望む素朴で善良な願望と審美的な理想を芸術的に表現している。これは仏教、道

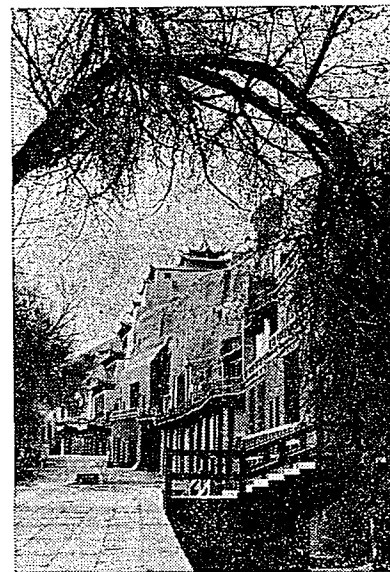
ある。しかし、当初は敦煌文献が大量に盗み去られたことから、資料の収集も容易でなく、また、研究者も少なかったこともあって、研究成果はあまり思わしくなかった。新中国成立後、学術研究は次第に盛んになり、敦煌研究も大いに成果を積み重ねてきた。例えば、『敦煌遺書総目索引』『敦煌曲初探』『敦煌—偉大なる文化の宝庫』『敦煌資料』第一集、『敦煌変文集』等の出版。敦煌文物研究所編纂の『敦煌壁画』『敦煌彩塑』『敦煌唐代图案』等の図録の出版があげられる。また、国内外で行なわれた二十数回にわたる敦煌芸術展覧会もその一つの成果に加えることができる。こうした成果は国際文化交流の中で積極的な役割を果たし、一九五八年には、敦煌芸術の展覧会が東京でも開催され、中日の友好と文化交流を大いに促進させるに至った。

十年に及ぶ文革の動乱の中で、敦煌学は批判を受け、その間、敦煌研究は停滞してしまっただが、四人組打倒後、特に中国共産党第十一期第三回中央総会以降、中国では混乱を收拾し、秩序を回復させ、政策が根をおろして、国家経済建設が見事な発展の軌道に乗るとともに、

敦煌学も空前の発展を遂げてきた。

敦煌学は、敦煌と切っても切り離せない。故に敦煌莫高窟を開放したことは、国内外の敦煌学研究に多大な影響を与えた。まず、国内国外の学者が続々と敦煌に来て、参観、訪問、調査をすると同時に、敦煌壁画も日本やフランスで模写の展示を行なった。これは、中日、中仏両国人民の友情を促進しただけでなく、日本とフランスの学者に、貴重な資料を提供したのであり、特に、展覧会の期間に行なわれたわが国と日本の学者との学術座談会、中仏の学者の敦煌学術シンポジウムでの経験交流は、共に、国際的な敦煌学の交流と提携を大いに促進させたのである。中国文物出版社と日本の平凡社の協力で開催された中国石窟シリーズの中の『敦煌莫高窟』五巻本、フランスで近々出版される『中仏敦煌学術シンポジウム論文集』等は、まさに、この段階における国際敦煌学提携の新しい成果である。

国際的な敦煌学の高まりの中で、わが国の敦煌学研究は空前の繁栄を示す段階に至った。まず、四十年の歴史



敦煌莫高窟の前景

家、儒学、歴史、美学、文学、美術史全てと密接な関係を持ち、また、複雑な統一体をなしているといえよう。

敦煌文書と敦煌石窟は、各自異なった領域を持ち、自らの体系をなしつつも、また相互補完の関係があり、複雑に入り組みながら各方面に極めて関連の広い学科群を形成している。現在、世界で二十に及ぶ国家或いは地域の学者がこの学問の研究に携わっているが、主として中国、日本、フランス、イギリス等の国々で、すでにすばらしい成果を収め、この数年また更に、新たな発展を上げている。日本の学者は、歴史、経済、宗教、文学、石

窟芸術等各方面から新たな探求をし、多くの成果を収めている。例えば、中日共同編纂による『敦煌莫高窟』五巻本と『敦煌石窟』における日本の専門家の論文、或いは日本で出版されているシリーズ『講座敦煌』等は、その一部である。フランスの学者は、言語、文字、民族、宗教、文学等の方面にわたって多くの論文を出しているが、同時にペリオが略奪した蔵経目録とペリオの石窟記録手稿をひきつづき出版している。ソ連の学者も研究を進め、略奪した経典目録を徐々に編纂しており、イギリスで編纂されたスタイン略奪にかかわる敦煌画は、現在、日本で次々に出版されている。その他、西ドイツ、オーストラリア、インド、アメリカ等でも研究が盛んに行なわれており、特に、アメリカのニューヨーク大学芸術研究所の学生が卒業論文で、敦煌石窟の芸術を論じるまでになったことは、『敦煌ブーム』がアメリカまで影響を及ぼしている一つの証拠であると言える。

「敦煌学」研究は、中国において最も早く始められた。「敦煌学」という言葉も、陳寅恪先生が名づけたもので

を持つ敦煌文物研究所は、仕事の重点を模写から更に深い研究に移し、敦煌遺書研究室を設立させ、まず研究所が所蔵している敦煌遺書に対する研究に着手した。この三、四年に學術論文七十五篇を発表し、『敦煌莫高窟』五卷本、『敦煌研究文集』敦煌研究所學報の『敦煌研究』(二期まで出版済、三期は印刷中)と『敦煌莫高窟内容総録』等、更に国内のその他の出版物に各々掲載され、国内外の学者の注目と好評を博している。それと同時に、北京大学唐史研究センター文書研究室の出版した『敦煌文書研究論文集』、武漢大学歴史系の出版した『吐魯番文書研究論文集』の二冊は、敦煌と吐魯番の数多くの文書を精細に考証し、深く研究したもので、共に有名な専門家の指導の下で得た新たな成果であり、国内国外共に重視され好評を博している。甘肅省では、蘭州大学歴史系が敦煌研究室を設立し、『敦煌學集刊』をすでに四期まで出版しており、また、西北師範学院歴史系は敦煌學研究所を設立し、一連の論文を発表している。このほか、浙江大学では敦煌學講習班を設け、北京大学、中山大学、南京大学、四川大学、山東大学、中央美術学院では、敦

煌文献或いは石窟に関する講座を開設し、数多くの人材を養成している。

中国の敦煌學研究は独自の特色を備えた新領域である。敦煌藝術の遺産を吟味しながら継承し、古きを推して新しきを出すの手法で、社会主義時代の新たな藝術を創造することも、その一つにあげられる。歴史舞劇で世界に名を馳せた「シルクロードの花吹雪」は、その典型的な優れた作品で、静止している壁画を通して、敦煌舞踊の運動の法則を研究し、敦煌舞踊の優美な姿、手の動き、そして所作のリズムの美しさを創造的に展開させている。また音楽の上では、敦煌文書に伝わる唐代の曲を再現して、現在ではすでに三人の学者が競い合うまでになっており(その中の一人は日本である)、すでに絶えていた唐代音楽を千数百年後の今日の人々に聞かせてくれるのである。壁画では、この数年来、多くの建築に裝飾壁画として利用されており、人民大会堂甘肅ホール巨大な壁画は敦煌壁画の特徴を生かして創作したものである。敦煌の図案は、絨毯や絹織物に運用され現代風にアレンジされて、見事な発展を遂げている。要するに、

敦煌藝術の遺産は、中国社会主義の精神文明の建設の中で、益々積極的な作用を及ぼしてくるようになったのである。

八〇年代の敦煌學は、新たな歴史的段階に入った。一九八三年八月、中国では、敦煌吐魯番學會成立大会と一九八三年全国敦煌學學術シンポジウムを開催したが、シンポジウムに参加した学者は二百余人に及び、席上、敦煌の歴史地理、石窟考古、敦煌文書、敦煌文學、敦煌美術、言語文字、宗教民族、敦煌の音楽舞踊、中西文化交流等の方面に関する論文、百余篇を発表し、実り豊かな成果をあげ、近々、その論文集を出版する予定である。又このシンポジウムでは、敦煌・吐魯番學會を設立させ、会長、副会長、理事を選出し、仕事内容を討論し、わが国の敦煌學、吐魯番學の大いなる発展の促進を図っている。

当面の敦煌學の情勢を総合して見ると、次のように言えると思われる。

一、現在の敦煌學の各種の文献研究は、基本的にはや

はり個々の文書の研究に止まっているが、この仕事は最も基本的な科学研究であり、これは分類研究や、総合研究、及び深い理論研究の基礎となるものと言える。現在中国(台湾、香港、マカオを含めた)と日本、フランス等の学者は、主に、この方法を採用し、数多くの重要な文献に対して、字の識別、記録、校勘(古書の内容や字句の異同等の研究)、訓詁(古書の解釈)、そして考訂(古書の真偽、異同等の研究)を行ない、科学研究の信頼できる根拠になっている。日本、フランスの学者は共にこの作業において豊富な経験を積み上げ、多くの成果を収め、しかもすでに分類研究、総合研究をも進めている。しかし、資料が不完全なため、時には困難があるようである。中国では、現在、国内の各地に散失した文献を含めた『敦煌文献総目』の編集に着手し、計画的に、全ての敦煌文献の資料を出版していく予定である。これによって、敦煌研究の新たな領域を開き、更に深い発展を促進していくものと確信している。

二、敦煌石窟の研究は、敦煌文物研究所が、その主要な任務を担っている。四十年来、深く精細な調査の中

三、今日のように科学技術が日ましに発達している時代の中で、各国人民の間の友好往来、各国の学者間の学術交流は、必然的に更に頻繁になるであろうし、学術交流を通して、敦煌学研究が必ずや発展するであろうことを確信している。この数年来、各国の考古学者、歴史家、哲学者、宗教家、美術家、音楽家、舞蹈家、美術史家、博物館専門家、文物保护専門家等々が、絶えず敦煌に来て、参観、調査、学術経験交流を進めており、事実上、敦煌はすでに敦煌学の交流センターになりつつある。敦煌に来る学者の中で、一番多いのはやはり日本の学者である。故に、私は、学術交流を通して、中国の学

前「罽」であることがわかり、これで初めて、長寿二年（六九三年）翻訳された『仏説宝雨經』の中から、経變の全ての内容が、明らかにになったわけである。また石窟芸術史の研究、国内と各国の石窟の比較研究、宗教芸術の美学的研究などについても、次第に研究が進められている。日本、フランス及びソ連の、中央アジア一帯における、仏教遺跡の調査、発掘の成果は、私達にとっても、貴重な参考資料になっている。

者と各国の学者、特に日本の敦煌学者との間の友情、そして学術上の交流と協力を必ずや促進することができるものと確信している。国際敦煌学研究の更なる発展を願うものである。

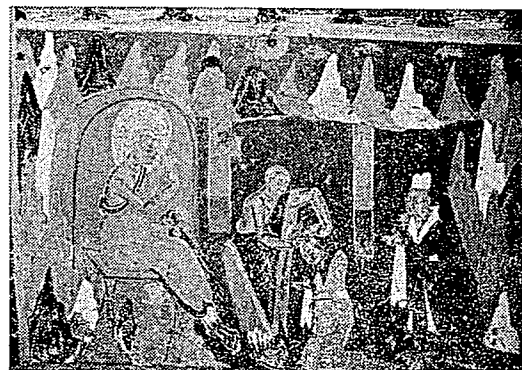
（だんぶんけつ・敦煌文物研究所所長）

（とうけんご・成城大学教授）

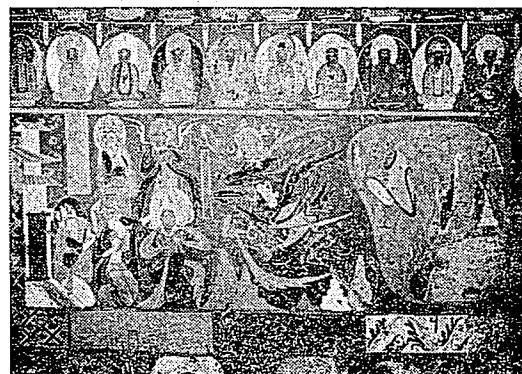
〔付記〕 本稿は、昨年十一月二日、日経小ホールで行われた、東洋哲学研究所主催の特別講演会の講演原稿に、加筆訂正されたものである。

で、実際に調査して得た資料を全面的に掌握し、石窟の時代の判別と区分、石窟の内容の考証に對して、喜ばしい成果を上げてきた。まず、現存する最も初期の石窟は北涼であると断定し、北魏、隋の石窟の中から北周窟を比定し、宋元の石窟の中から西夏窟を比定するなど、歴史の本来の姿を復元させた。また、例えば、「仏伝」とされてきた壁画を「沙弥守戒自殺因縁」と訂正し、「赴

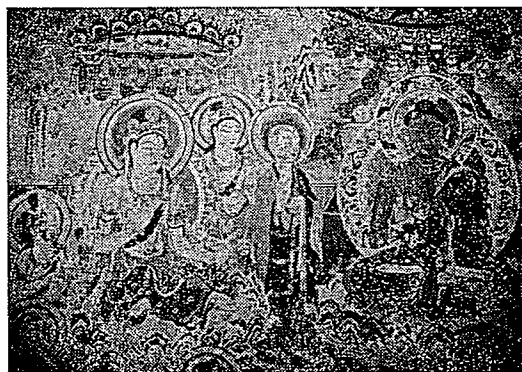
会菩薩」を「須摩提女因縁」と訂正するなど過去の数多くの誤った内容をも訂正した。更に新たな内容をも発見した。例えば、背屏後方の大仏像は「劉薩訶縁起」であり、また数十年来、名前を定められなかった三二一窟南壁経變は、長期にわたる考究を経て、経變上部の一条の雲海の中に二つの手があり、一方に月を託し、一方に日を託し、日と月が空にかかっているのを、則天武后の名



第257窟南壁 沙弥守戒自殺因縁（部分）



第257窟西壁 須摩提女因縁（部分）



第103窟南壁 法華経變（部分）